

太祖神楽



この町にある若杉山の麓にある若杉地区に

明治時代を迎えると、神楽座は解体されました

伝わる太祖神楽は、1596（慶長年間）に福岡藩主黒田長政が、宗教政策の一つとして各郡ごとに神職による神楽座を組織させたことに始まりです。



が、社家の一人で神楽の名手といわれた太祖神社の神職、佐々雪が、1914（大正3）年に、神楽を氏子たちに伝授しました。

その後、第2次世界大戦などの影響により、神楽消滅の憂き目に遭いましたが、これを危惧した佐々雪に直接教えを受けた者が、1952（昭

和27）年ごろから教え始め、神楽の再興を図りました。それから、関係者の熱意により現在まで伝承され、1960（昭和35）年には福岡県指定無形文化財に、1976（昭和51）年には福岡県指定無形民俗文化財に指定されました。

現在は、4月14日に近い日曜日と10月16日に行われます。

演目は、神舞（1人）、御幣舞（2人）、五行舞（風神、土神、四柱）、久米舞（1人）、手草舞（2人）、臺目舞（1人）、蛭子舞（小神楽、蛭子、平手舞（4人）、四剣舞（4人）、天孫降臨（中臣、

鹿嶋、武御名方、前駆、細女、猿田彦）、竜都（火之闌降、出見、塩土、豊玉姫、海神、玉持姫）、天磐戸（思兼、四神、屋根、鈿女、手力男）、異

国降伏（武内、磯良、豊姫、海神）の13演目から4演目のみが行われることが多かったのですが、近年になり3演目が復活し、現在では7演目が行われています。

太祖神社下宮神楽殿の中央に「天敷」を下げ、四方の柱に「しめ」を飾り、後方には幕を張り、白衣、袴に烏帽子を被った衆人による太鼓、横笛、ジャンバルを囃子として、神舞は右手に神、左

手に鈴を持ち神を讃えて優雅に舞いますが、臺目舞、四剣舞は素早く荒々しいのが特徴です。

特に4人で舞う四剣舞は、足を踏み鳴らし、中央に寄っては剣を打ち合わせ、四方へ駆け離れる所作を繰り返し、掛け声に合わせ激しく動き舞います。

蛭子舞は、恵比寿の面をつけた舞手が釣り竿で、祈願成就に訪れて奉納されたお酒などを次々と釣り上げ、最後にタイを釣り上げて終わりです。この舞いの途中には、紅白の餅を観客へまきます。

磐戸開きは、複数の舞

人が面を付け、天磐戸の物語を演じます。

出典：第49回九州地区民俗芸能大会記録集から（文章は一部変更しています）。